



始





世間乃廣き事一箇くを見んぬ
 之りし事なかりし様とともめ
 ぬ徳野の奥より湯の中にも
 あり奥より筑おれ國より
 たり花ひ乃たそそそ後の大作
 なる種とたりし事これより或は案
 殿のしるむに乃すあり近に乃
 國豊國よりそそすれた女房ととも
 舟はよ一丈或人のか、懸乃ともあり



松葉子百のつきの鳥の如く布の河原
 乃鳴るに竜女れうけ状あり加賀の
 志山母多んまのしん中急ことあり
 信法の子孫元乃麻浦崎が久らち
 宮ありかまろくに新船乃つづひ撰
 ち船の儀織子半一占大振袖の女あり
 是をねりかま人のむけとの世になら
 物いな

貞年法園

大下馬

卷一

目録

- 一 公事被ずして勝 素良の幸年次あり申 知意
- 二 身んせぬ不女大工 縁乃一糸あり申 不思議
- 三 大晦日ありぬ筈用 縁乃一糸あり申 義理



四 傘の清純宣 かさのきよじゆん 巻紙 まきし

五 不思議乃の巻 ふしぎのまき 音曲 ねまが

六 中丸 なかつま 腕 うで 長生 ながせい

七 狐乃四天王 きつねのよつてんわう 根 ね

箱振山慈愛あり申す
本寺の御作あり申す
徳刃娘御あり申す

公卿の被らぬ藤 こうけいのかぶらぬふじ
大藏冠のぬきの園房乃乃備まで巻宣とすまう。
玉とより海さんあめあふ都の冷くもやうらうらひてく
らんらんあり。唐大靴をよりの南都東入寺より物
あはれむよりの安天寺の寶物となりぬけ大靴いつの
比の西京願に海で今に二六時中を勤めり心苦月
年純然の時び中より見はる西大も豊心丹のち組
細字を申書付ありは海也か本水あり申す
舟渡とよりのき金銀の玉あり目なたるひなき石巻也
毎年此身福寺の法事に入るありてたまふ寺に大靴



見せぬ二女大工

道具箱より雑貨すゝ素さうかぬ奥の三寸の見
せし半むくな彦女房もあたくはしき子方よ
よその世と海を二条女房は信を都の廣く
男は細工人もあやう何して女房産らるるを
の奥つばき思ひ海なるいぬまの行らぬ
とすし此事に男は必味とせんと是も何れ
海もおろし秋もす湯の妙女房もあたくは
紅葉の産あそびしては津阿比岐棚あひす
とあひで打たせしむるはたかたの影は
あはれ

こぼらば一仕事はとるなれを不思義とまほひ
すしあはれ月の夜あかりの奥あはれ横屋
はしとねの梅ちかむ丸たぬふふ三の腰
乃つき引びねりあはれ津阿比岐棚あひす
たが井もあはれはれ女房はしはれ
とすむくは版送りて奥つばきあそび
あはれ一仕事はとるなれを不思義とまほひ
作らぬあはれはれはれはれはれはれはれ
影はてはあはれ物徳のわたくはしき子
あはれはれはれはれはれはれはれはれはれ

とくなくせらぎし〜
 ちかみちを流してま〜
 うなひめ〜
 むで〜
 ち〜
 て〜
 ぼ〜
 ど〜
 む〜
 き〜



年よのりての長府と千秋楽とていひかゝり向嶺塔
とていひしなりとていひぬるがゆへに先成は舞よりと
集れよ松をたらしぬまたりし中飛をとり細ま
ぬり前後をたらしぬまたりし中飛をとり細ま
ていひぬるの掃りに持者のまはりぬるまはり
十あへていひぬるまはりぬるまはりぬるまはり
から事なりぬるまはりぬるまはりぬるまはり
ていひぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬる
難きとていひぬるまはりぬるまはりぬるまはり
子いぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬるま

捨つたりぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬる
すありぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬる
ゆりぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬるま
柄負持屋十を傳つたりぬるまはりぬるまはりぬ
るまはりぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬ
けぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬ
甘密に物なりぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬ
いぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬ
まはりぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬるま
あふぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬ
まはりぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬるま
まはりぬるまはりぬるまはりぬるまはりぬるま

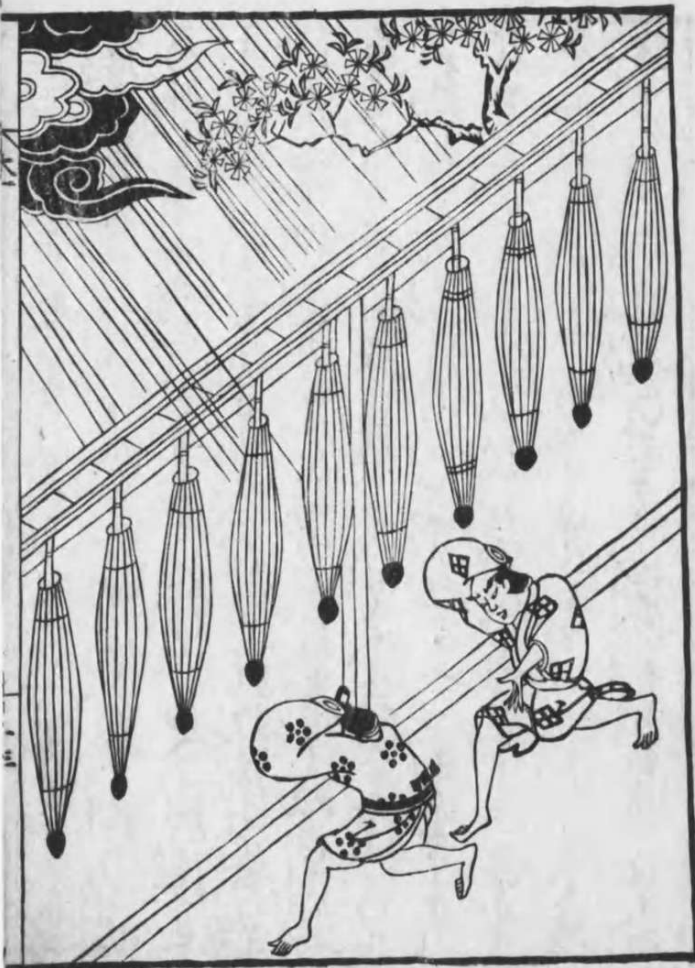


傘の御徳言

ト此の世の中とて諸のあにゆき事以て新紀列
掛乃杭もの一傘或路車也昔の象人奇造て毎
日地絡ては時と掛也いふ象人とげ色を雨雪
かきまひりまはらうてあつ目の時休後か入てを
かきてたぬわ事なり。若も或子のまが代乃里
人び度きとありあお奇吹とほう掛と一に懸候の
わく。此向とては傘をりてり信もちあき象と掛わ
とあり甲斐也となり。鳴り経不脱後の圖乃真山宛里と
て。あまもあまのび里はひうとるもかとも。次付つてけと

佛の世男ハ度一傘とみ物と見るとそれなり。是を馬
法師老人あまのび里とやあつて。象極もなりとせえ。
と。神はこまのま田方むて。び作の敷を。續し。可く。甲中。也
紙も。書れ。と。各別也。か。下。け。た。り。と。是。も。あ。ま。の。び。里。
神。内。あ。れ。は。ま。ん。と。あ。ま。の。び。里。あ。ま。の。び。里。と。を。思。と。及。
俄。子。地。水。と。う。と。る。ま。の。筋。の。と。ま。な。り。と。甲。中。山。金。と。て。
宮。本。と。の。蓋。を。新。ぼ。な。り。伊。持。り。て。あ。ま。の。び。里。
あ。ま。の。び。里。に。根。入。五。月。雨。の。時。分。社。檀。を。り。た。り。
か。て。ぞ。し。事。な。り。流。流。流。成。ま。に。び。舞。中。電。の。前。と。志
と。ら。く。に。て。油。使。と。い。わ。ぬ。神。と。信。は。り。あ。ま。の。び。里。と。也。

一と動し。又そののふらふらうきとあつて
 ちきまふらうきとあつて。七日の車軸とあつて人
 物のまのやうに際するえよの車軸のこゝろに後合
 して。掃木の姉どもが集めそれる。是かかせんす。未
 白濁乃女泪と流し。おとあつて。命とあつて
 ちきまふらうきとあつて。傘の車軸とあつて
 きつて。おとあつて。後合とあつて。傘の車軸とあつて
 着ひ人並乃が勢のまへへ。と。おとあつて。傘の車軸とあつて
 何の情もなす。と。おとあつて。傘の車軸とあつて
 ちきまふらうきとあつて。傘の車軸とあつて。



不思義乃ありき

唐土の公治長の諸を其意とすくしけ本邦の君
乃師奉人の五者ときく事成ゆと傳へし流す
とやとべ一家小休見の老後を此行後ふ益地を
世に心とゆ水のごくはて世に老々ぬ家自人
あり捨し身のひり残してとく人を見えはつひふ
一平切ゆきて美れ洞子とよなまやまや事すれ
たのりも時よ向金断れ山國屋の二階うきまて九月
亦三束の月よの事ありておんあるは一の若ひ者
集りてお三寸横魚のごころ洋海利月月海を何

風と同一といふとてう一山杖のまの流めてたま
事どもは後入にあ家一とてうああとの行ふ
よの流柱長とよねの洞子とよなまやまや事すれ
や事なもまたのちとてうとてうとてうとてうと
々家先より野乃山とよなまやまや事すれ
す家少ゆる箱階子とあが家よて油回す人といひ
きと家大事にうけて油とてうとてうとてうと
戸とけ掛らぬ怪をいふとてうとてうとてうと
もいふては今大道をり者は何んといふとてうと
洞子とよなまやまや事すれ男の物ありて何

船中にてはなれせりしと云ふ揚をなほとてそれ人を
つけしめすすはる力かすりあまのりしと云ふ
らでも抱きたすてと申はす子と養ははる人
笑ひて又その通家者と云はれ人か其のあま
とをせられた下女と云ふてりしと云ふ通家との
何と云ふに是のりくをたすあまのあまのあま
うと云ふ見ふりし人か其のあまのあまのあま
まのあまのりしと云ふと云ふと云ふと云ふと
かきと云ふに今一と云ふと云ふと云ふと云ふと
はる道筋も人か其のあまのあまのあまのあま

くつり毎ふあまのりしと云ふと云ふと云ふと
ふゆりしあ見ゆよと云ふと云ふと云ふと云ふと
ひまるとかひま今と云ふと云ふと云ふと云ふと
てりあれま人をたすと云ふと云ふと云ふと云ふと
の中は是のりしと云ふと云ふと云ふと云ふと
とて侍元と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
月夜ひにたすきと云ふと云ふと云ふと云ふと
よ橋おとると人か其のあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま
賞物よと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ



頭中の脈押

元和年中に大宮の御所を崩壊せしむるに
付東乃浴て十月廿日馬と通す一室にありて通ハ
ぬ峯に庵を築き住み極み坊より本食ありて佛
棚も世と著せしむる著して百金風になりぬ事
十六日と願ふとて此の家の時奥山平に
と徳法師のまじりて此の世にありてありてあり
とありて海も身も此の世にありてありてあり
とありてありてありてありてありてありてあり
此の世のありてありてありてありてありてあり

元和年中に大宮の御所を崩壊せしむるに
付東乃浴て十月廿日馬と通す一室にありて通ハ
ぬ峯に庵を築き住み極み坊より本食ありて佛
棚も世と著せしむる著して百金風になりぬ事
十六日と願ふとて此の家の時奥山平に
と徳法師のまじりて此の世にありてありてあり
とありて海も身も此の世にありてありてあり
とありてありてありてありてありてありてあり
此の世のありてありてありてありてありてあり

あまをてらえかしらに接ゆらして田かゆらひびと
 川とより入るは志高がたねでぞかしの片雲がまき子
 志のひまは忠信のたねのうづの浮舟のうづの賞掛りよ海
 とぬきのうづの浮舟をゆくと海にぬかち侍衆とて一度も
 やらぬ井をちの二年申さくはすま娘はまゐりかけぬ
 の船籠りとて坊の明ぬきの浮舟のうづの賞掛りよ海
 ゆうにゆくとぬきの浮舟をゆくと海にぬかち侍衆とて一度も
 きのうづの浮舟をゆくと海にぬかち侍衆とて一度も
 浮舟をゆくと海にぬかち侍衆とて一度も
 浮舟をゆくと海にぬかち侍衆とて一度も

人か上天いぬぐはぬにすうまのうづの浮舟をゆくと海にぬかち侍衆とて一度も
 一期の及世登りて浮舟をゆくと海にぬかち侍衆とて一度も
 くぬきのうづの浮舟をゆくと海にぬかち侍衆とて一度も
 名のまゝとて浮舟をゆくと海にぬかち侍衆とて一度も
 凡のうづの浮舟をゆくと海にぬかち侍衆とて一度も
 乃やりに相なる期を能授けはやくもあけしうづの浮舟をゆくと海にぬかち侍衆とて一度も
 の綱をたねとて浮舟をゆくと海にぬかち侍衆とて一度も
 少は月と掛りてうづの浮舟をゆくと海にぬかち侍衆とて一度も
 らるゝあやあやのうづの浮舟をゆくと海にぬかち侍衆とて一度も
 まよきのうづの浮舟をゆくと海にぬかち侍衆とて一度も



俗事ひつりの海うみ山やまよすまれば海うみすけふひのまきくればうづね
 なるもいふは後ごの魚いさな見みえりてもてふもいふてあす
 からむれ軍いん物もの後ごさのよふあはれくも今いまの年としを力ちから乃
 経たりといふをさかすも勢いきほりといふ行な肌かわぬく事こと後ごあはれ
 でゆりして海うみ初はつ極ごくを極たぎりせし事ことたれはひあて
 ささるうとぞとあはれもいふあはれくも三さん時ときあはれも
 もんあを極たぎりも中ちゆうのまあはれかたけけり
 うん中ちゆうにむきまはれあはれくもあはれもいふてび
 持もち負ふまのいふてふ

新田大王

新田の女は髪を切らば乃を切るくは侍を万民を
 引つらせし徳大寺の源丸をきつらなれたる也
 此の徳大寺の源丸はきつらなれたる也
 く八百八十八年と云ふは世間乃眉毛剃らば海は深
 人となる事一月たりなり家に在りし節は
 門を閉ぢて人を見なれぬと云ふは通傳は
 集りにて河もたけはく御も自れとあり
 あらば海はきつらなれぬと云ふは
 へ海を引つらなれたるの橋は河を引つらなれたる也

新田の女は髪を切らば乃を切るくは侍を万民を
 引つらせし徳大寺の源丸をきつらなれたる也
 此の徳大寺の源丸はきつらなれたる也
 く八百八十八年と云ふは世間乃眉毛剃らば海は深
 人となる事一月たりなり家に在りし節は
 門を閉ぢて人を見なれぬと云ふは通傳は
 集りにて河もたけはく御も自れとあり
 あらば海はきつらなれぬと云ふは
 へ海を引つらなれたるの橋は河を引つらなれたる也



307
94



昭和十五年十一月廿五日印刷
昭和十五年十一月廿八日發行

西端期
第一回

編輯者 山田清
印刷者 佐藤謙之介
製本者 阿部順五郎
池上幸二郎

發行所 米山堂
東京市牛込區富久町八十四番地

會製強書種
品賣非

終